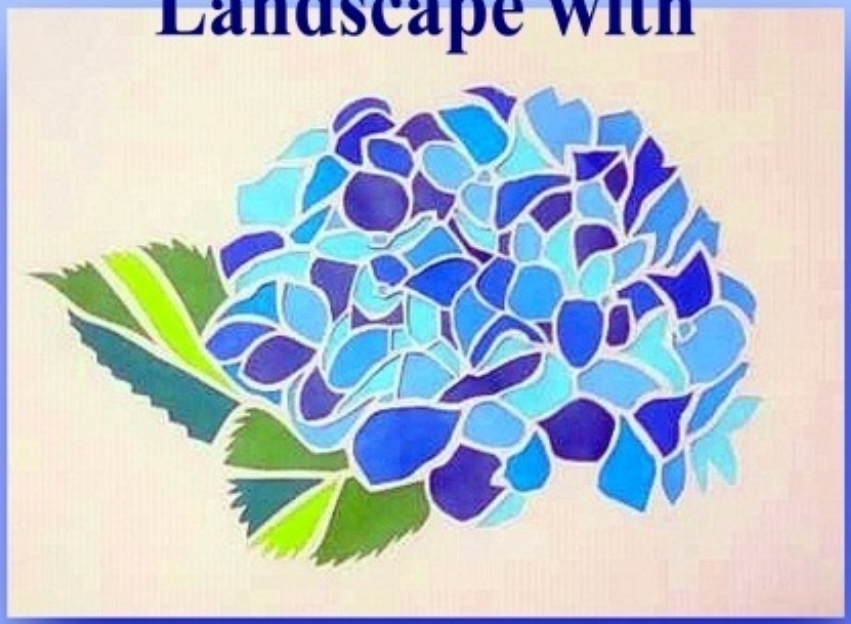
Mixi コミュニティ
『創作が好き！』編集
第５作品集

紫陽花のある

Landscape with



風景

Hydrangeas

２０１２年５月２日～６月１日
テーマ企画
『紫陽花のある風景』
参加作品集

冒頭に寄せて

そう・さく〔サウ・〕【創作】
1 新しいものをつくり出すこと。
2 文学・絵画などの芸術を独創的につくり出すこと。また、その作品。
3 つくりごと。うそ。

そうさくぶつ【創作物】
1 創作されたもの。特に、芸術作品にいう。
2 人の知的創作活動の産物の総称。
著作物・発明品・実用新案・意匠・商標など。

『創作』活動を至上の喜びとする作家が居る。
そのような作家たちのコミュニケーションの場を提供したいと開設されたのが、Mixi内のコミュニティ『創作が好き！』である。

その中で企画立案された、『紫陽花』をテーマにした作品群を、今回は電子書籍の形でまとめてみた。
我々の活動を広く知ってもらいたいという理由からである。

各作家は、それぞれの個性をフルに発揮し、
それぞれの想う『紫陽花』を表現している。
読後に彼らの思い描いた『紫陽花』が貴方の目の前に広がらんことを。

著者紹介

宇瑠璃春花

物語を書くのが好きで、ペンネームは『宇瑠璃春花』と申します。
日頃は、看護師として働きつつ、不定期で自分のアホアホ生活日記と、自作の物語をアップしています。
私の今年の目標は『のんきで楽しく生活する』です。
創作以外に今好きなことは、小麦粉を使ったお菓子やパン作り、落書きをすること、物語やマンガを読むこと、いろんなことを不思議に思って空想してワクワクすることなどです。
厨二をこじらせて三十路でアホやってるしあわせ女魔法使いであります(・ω・)ﾉ

流民

7月27日生まれ。ショートショートから長編まで、多彩なジャンルを優雅に描き出す作家。
ご自身でもmixiにて創作コミュニティ『自由企画』を運営されており、積極的に創作活動を行なっている。
良く女性や未成年に間違えられることもあるが、爽やかな笑顔でさらりと交わす関西人である。

橘紀琥

10月20日生まれ。代表作に「暁、来ぬ間に」作詞「LIVE a-Live」がある。
好奇心旺盛で、興味をもったらすぐ行動するが、積極的に突き進みすぎて、道ばたでコケる女子。読書と映画・アニメ鑑賞、料理&お菓子・パン作りに創作(小説・作詞・エッセイ)を趣味とする専業主婦である。
特技はピアノとヒップホップダンス、そして人に本を薦めること。

楢崎　六呂

１９７３年２月福井県福井市に生まれる。消防設備士の仕事の傍ら、高校時代から二五歳まで続けていた執筆活動を再開。ハンドルネーム『かーる』として、Mixi のコミュニティ『創作が好き！』にて副管理人を務める。

超短編小説を毎日一作品執筆する傍ら、中長編作品の執筆も精力的に進めている。

執筆作品に、『私的国語辞典』『リトライ』『サンタクロース☆クライシス』などがある。

プロレスはミーハー的に大好き。詰問と無視に弱い。

写真提供者

翠・さほ（順不同）

『あじさい』（宇瑠璃春花　著）

あらあら
じぶんの
さいふをなくし
いらいらしてるのだれかしら

あのとき
じっくり
さがしておけば

いちばんはやくみつけてたのに

あいさつしたら

じっくりみられて

さっさとここから

いってしまった

あれからすぐに

じんじゃのけいだい

さしだされたのは

いつかのさいふ

あのときわたせず
じぶんをせめたと
さいごのわびを
いうきみに

あれはいいんだ
じぶんもわるいと

さしだすてのひら
いっぱいえがお

あきれたあいても
じゅうぶんわびて
さあいこうと
いっしょにあそぶ

あのひのおもいで
じっくりなぞり

さいあいのひと
いつかのきみ

あじさいのはな
じとじとあめでも
さっそうとさく
いつものみちで
あれからなんねん

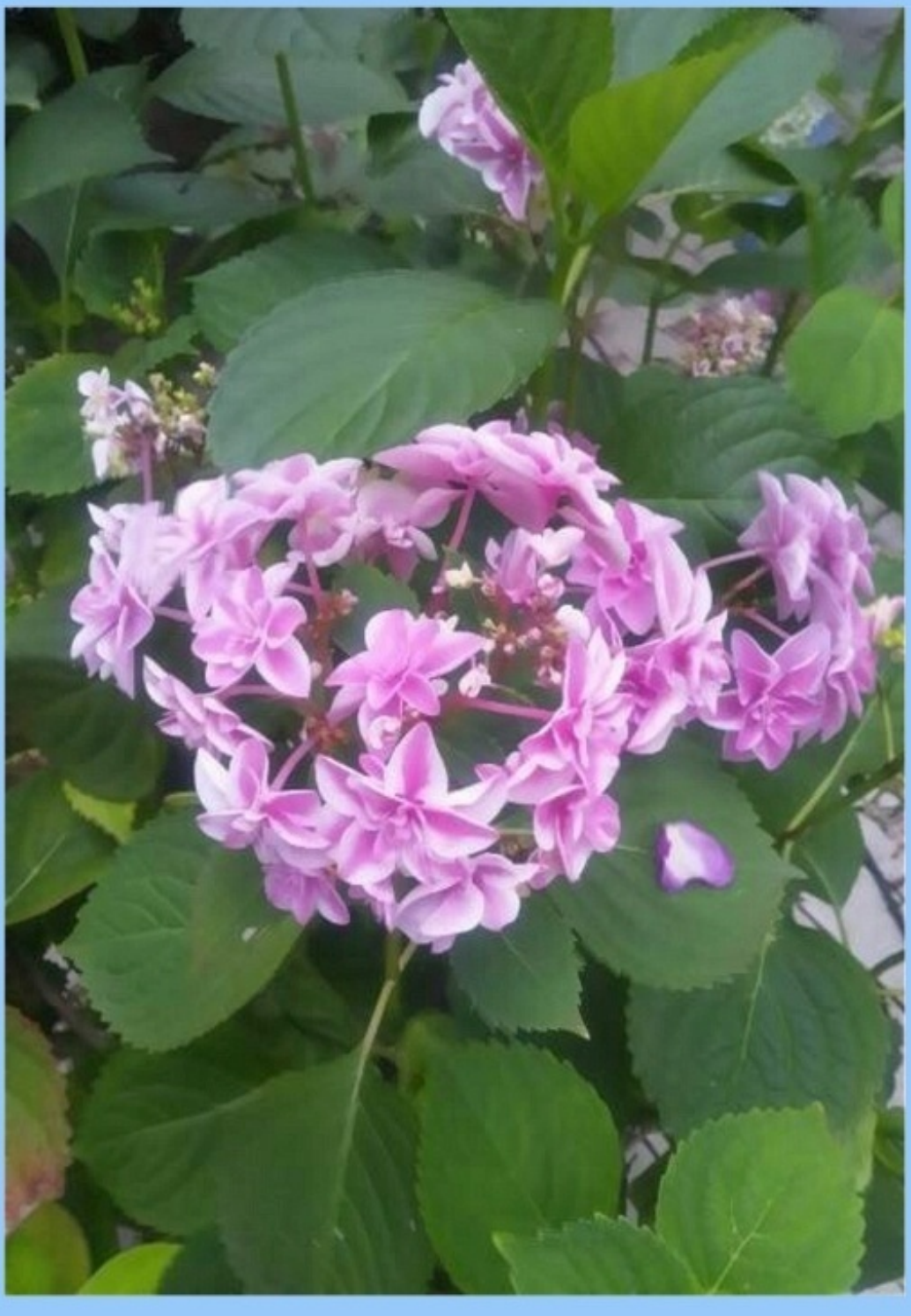
じかんがすぎても
さいはてのむかしと
いまもおなじ

あじさいをたおり
じまんのきみに
さいあいのきみに
いちばんのおみやげ
あいしているよ

じぶんもしあわせ
さいごまですごそう
いつもいっしょだ

あいしているわ
じぶんもしあわせ
さいごまですごそう
いつもいっしょね

あじさい@宇瑠璃春花



（Photo By さほ）

紫陽花（流民　著）

今日も雨が降り続ける……
もう何日目になるだろう。
ニュースキャスターは冷淡に話続ける。今世紀始まって以来の異常気象だと、連日のように報道している。
しかし、マスコミの世界は移り気で、直ぐに違うニュースを流し始める。
そんなテレビを私はあなたと二人で眺めている。
もうあなたと二人で生活をするようになってどれくらいたつだろう、最初は優しかったあなた、無情にも時の流れはあなたの心を変えていき、私はそれを辛抱強い愛情で見守った……
でも、もうそろそろあなたのそんな高慢な態度に、私は耐えれなくなって、私の心は折れてしまった……
そしてテレビが流すニュースを見ながら私はあなたに最後の言葉を投げ掛ける。
「ねえ、もう私たち……」
雨は降り続ける、世界を彩る葉を濡らしながら。
（了）

「無題」（翠　著）

紫陽花のまた滞りなく寄る季節の気配に、
ためいきするのは、
その花弁のダイヤがひしめきあっており、
少し厚い折り紙の、
無造作にちぎりなんなく重ねる感じ、その感じ。

おまえの庭に咲く微小の花の名も知らぬとは、
いよいよ生活人にあるまじき、即刻四季とともに生きよ。
という内容の詩をひとつ書き捨てたときに、
畳の上の、
あぐらの足の裏がそれはそれは予想よりも黒く汚く、
庭の花よりも鼻先にある足の裏の黒さを、
ああ六月は陰気の昼を演出して多分やってきて、
おそろしくさせる。

通りに沿う数学的な折り重なりに、陰鬱の気持ちは果たして。

（了）

（Photo By 翠）

「紫陽花色の奇蹟」（橘紀琥　著）

あなたのことを、意識し始めたのは、一体いつの頃からだろうか？　気がつくと、私の横を通り過ぎるあなたをいつも目で追っていた。私とあなたの視線が交わることは、一度としてなかった。それは当然のことだし、これからも、そんな「奇蹟」がこの身に降ってくることはない。そう思っていた。あの、雨の日までは――。

「大丈夫？」

顔を上げると、心配そうなあなたが覗いた。天から降り注ぐ幾千もの雫が地面という地面を濡らしているのに、それらが私達の上に落ちてこないことも不思議だったが、何より、あなたが私のことをじっと見つめていることに、とても驚いた。いつも、あなたは私のことなんか気にもとめずに、すぐそばを通り過ぎ、あの山門をくぐって行ってしまうのに……。

「具合、悪いの？　傘、ないならコレ貸そうか？」

「カサ……？」

ああ、雨を遮っているコレのことか。けど、そんなことより――。

「どうして？」
呆けたような私のつぶやきを気にとめた風もなく、あなたは、傘を持っていない方の手を差し伸べ、
「立てる？」
と、再び声をかけた。
その手を握って引き上げられると、ずっと遠くで見ていた顔が、急に近くなった。澄んだ黒い瞳、通った鼻筋、膨らみのある唇……。なんて綺麗なんだろう。つい見入ってしまう。
「どこも怪我していないみたいだし、大丈夫そうだね」
安心したのか、あなたの口元が緩んだ。
「本当に傘、貸さなくて大丈夫？　高校生？　誰かと待ち合わせ？」
「そうじゃ、ないんですけど……」
何を、どう伝えれば良いのか分からず、視線を背ける。
ずっと、話がしたかった。横をすり抜けていくたび、どこに行くのか知りたかった。そして、共に並んで歩きたかった。だから、ずっとずっと願い続けた。一度でいいから、たったひとときでもいいから、「人間」になって、あなたの前に立つことを――。

それが、何の前触れもなく、急に叶ってしまうなんて、思ってもみなかった。

「……くりだ」

「え？」

「君が来ている浴衣の色、そこに咲いている紫陽花の色とそっくりだ、て。とても似合っててカワイイね」

私が身に纏っているものを指差し、あなたははにかんだ。振り返ると、私の後ろの植え込みに薄い青白色の紫陽花達が満開を迎えていた。石段よりのところに、ちょうどひと株分の、不自然なスペースが空いている。

「ひょっとして、余計なお世話だったかな？　困っている人を見るとほっとけない性格でね。でも、若い女の子をナンパしているオジサンみたいになっちゃったね」

と、頭を掻いている。

どうしよう。何か言わないと、あなたは行ってしまう。でも、一体なんと言って引き止めればいいんだろう。じゃあ、と向けられた背中に、精一杯の勇気をぶつける。

「あの！　お願いがあるんですけど！」

山門への階段に足をかけたまま、あなたは振り返って首を傾げた。
「つ、連れて行ってもらえませんか？　あなたが、いつも行っている場所へ！」

「この深大寺によく散歩に来てるんだ」
一つの傘に二人で入りながら、山門をくぐり、並んで歩く。
「この深大寺には、ロマンチックな話があってさ。昔、福満ていう男が、とある豪族の娘に恋をしたんだ。けれど、娘の両親に猛反対されちゃってね、娘は、湖の小島に閉じ込められちゃったんだ。そこで、福満は、彼女に会いたい一心で水神の深沙大王にお願いして、使いの霊亀に彼女のいる島まで連れて行ってもらった。このことを知った娘の両親は、やっとその仲を認め、二人はめでたく結ばれた。で、二人の子どもである満功上人が水神に感謝して、この寺を建てたってワケ。だから、このお寺は縁結びで有名なんだけど、まあ、君みたいな女の子が好きそうなネタだよね」
縁結び。確かに、山門を通り過ぎて行く人々の中に、何やら真剣な面持ちの女性を何人か見かけた覚えがある。

「それにしても、まさか仕事をサボっているところを見られていたなんて、気づかなかったなぁ」
この人の癖なんだろうか。困ったり、恥ずかしかったりすると、自分の後頭部を掻く。それが間近で見れることも、触れられる距離にいることも新鮮に感じて、つい笑みがこぼれる。
「着いたよ、ここが本堂」
「みんな、何をしているんですか？」
「何って、『お参り』に決まってるじゃないか」
「『お参り』？」
「したことないのかい？」
その問いにコクリとうなずく私を見て、
「それぐらいの歳でお寺でお参りもしたことがない、だなんて珍しいねぇ」
と、あなたは、私のことをしげしげと眺めた。視線が交わると照れくさいから、私は瞳を伏せる。
「ま、教えるより、実践で覚えた方がいい」
あなたは、私の背をそっと押して本堂へと歩み寄る。木造の階段を、一段、二段と上る。あなたが一旦、傘をとじている間に辺りをキョロキョロと見回す。

ここが、いつも、あなたが来ている場所なのか。私は、その場に何やら神聖なものを感じ、ほう、と溜め息を洩らした。

「はい、手を出して」

言う通りにすると、あなたは小さな穴の開いた〝何か〟をその手にのせた。

「お賽銭。良縁のこのお寺にかけて五円玉ね。で、そこのお賽銭箱に入れて」

あなたが投げ入れたお賽銭を飲み込んだ目の前の大きな木箱が、チャリーンと鳴いた。

「そして、こうやって手を合わせて、心の中で叶えて欲しいお願い事を唱えるんだ」

「お願い事？」

「そう。『恋人が欲しい』とか、『長生き出来ますように』とか、お願い事を言えば、神様がそれを叶えてくれるんだ」

ああ、そうか。ここは、神様に自分の望みを伝え、それを叶えてくれる場所だったのか。だから、私の願いを、神様が聞き届けてくださったのかもしれない。いっとき、人間にしてくれて、あなたと過ごす時間をくれた。

同じように、私はお賽銭を箱に入れ、手を合わせて目を閉じる。心の中で唱える言葉に、望みなんてない。あるのは、感謝の言葉のみ。

『素晴らしい時間を与えてくださって、ありがとうございます。私は、幸せです』

お参りを終えた後、少し参道を歩こう、とあなたから誘ってくれた。

参道では、おそば屋さんやお土産屋さんが軒を連ね、私達と同じ、傘を差しながらお店を見て回っている人達に声をかけている。灰色の雲が垂れこめ、鬱々とした梅雨空の下でも、この一画だけ活気があって、雲の切れ間から陽が射したように明るい。

「さっき、なんだかすごく熱心に手を合わせてたけど、何をお願いしていたの？」

「えっと、お願い、じゃなくて、お礼です」

「お礼？　もう願いが叶ったった、てこと？」

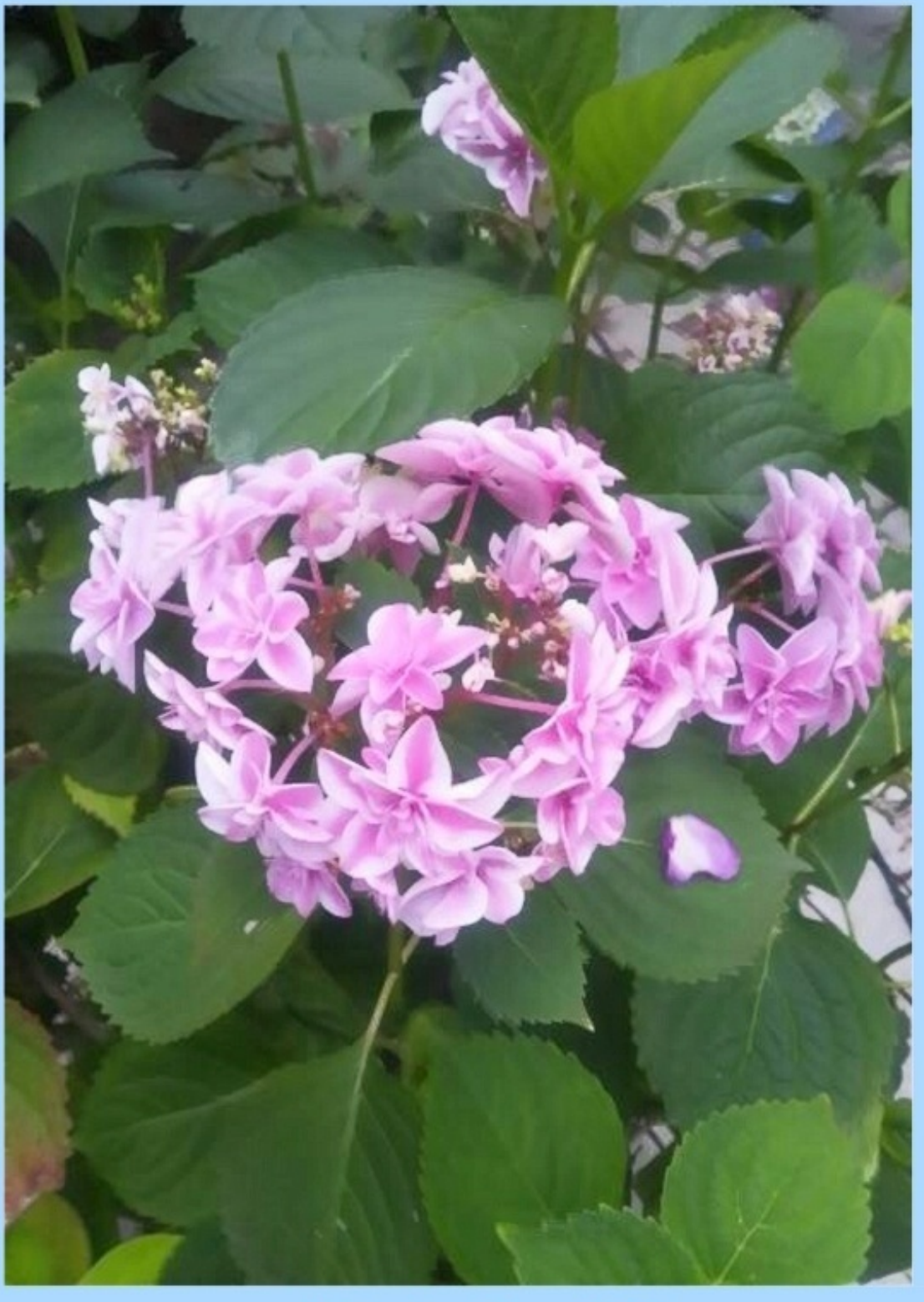
私はニッコリと微笑んで、大きくうなずいて見せた。

「いいなぁ。僕は何回もお参りに来ているのに、ちっとも叶う気配すらないんだが」

「何をお願いしていたんですか？」
「『これ以上働かないでも生きていけるようにしてください』て」
私には、意味がよく分からなかったけど、あなたが真剣な表情で言うから、きっと大事な願いなんだろう、て思った。
「大丈夫ですよ！　きっと叶います！」
励ましたつもりだったのに、あなたはなぜかポカンとした表情で私を見て、それから急にプッと噴き出した。
「君って本当に面白い子だね。そこは、フツー、ツッコむ所なんだけどなぁ。ダメだよ、君みたいな女の子がこんな大人になっちゃあ」
ケラケラと笑っていたあなたは、ふと、そばで聞こえるせせらぎに足を止めた。木で出来た看板の下を細い小川が通り、涼やかな音を奏でている。
「へぇ、この湧水の中にホタルやヤゴの幼虫がいるのか」
「ホタル？」
「ああ、夏の夜に、空気や水が綺麗な場所にしかいない、お尻が光る虫、かな。一匹でも綺麗だけど、たくさん飛んでいると、幻想的、ていうか、まるで夢の中にいるみたいなんだ」
「それは、ぜひ見てみたいです！」

二人で、と私が付け加える前に、
「ああ、君と一緒に見られたらいいな」
と、あなたが笑って言ってくれたから、ふいに泣きそうになった。叶わない願いと知っているからじゃない。ただ、嬉しかった。気がつくと、雨は止んでいた。

山門に戻ってくると、一人の男性が、あなたを見つけると、つかつかとこちらにやってきた。
「やっぱりここでしたか、清水先生。今日、月刊誌に載せる短編小説の原稿、いただけるお約束でしたよね？」
「ああ、ちょっと息抜きをね。ほら、この女の子と一緒に、……て、アレ？」
一歩先を歩いていたあなたは、振り返って、もう見えない私の姿を探す。
（あ、また頭を掻いた）
そんなあなたがおかしくて、クスクス笑う。あなたには、紫陽花の葉が揺れているようにしか、見えなかっただろうけれど……。
（了）



（Photo By さほ）

『紫陽花のある風景』（楢崎　六呂著）

紫陽花を外国では『水の容器』と呼ばれているのだ、と教わったのは、確かまだ俺が小さかった頃のことだったと思う。
その時は子供心に、
（こんな小さな花なのに水なんて貯められないじゃないか）
と呆れ果てたものだが、
あれから十数年経った現在ならその意味も少し解る気がする。
紫陽花は、人間と同じなんだ。
一人ひとりでは手に入れる事ができなくても、沢山集まれば手に入れる事ができる。
生活の糧を得ることも、成功の喜びも、
そう、他者の命さえも。

「あら、ジローじゃない。わざわざ来てくれたんだ」
背後から突然声をかけられた俺が庭に群生していた大量の紫陽花から背後へと目を向けると、そこには全体的にふっくらした感じの、物腰の柔らかそうな中年女性が、片手にガーデニングセットを持って立っていた。
「久しぶり、マダム」
「久しぶりじゃないわよ、すっかりご無沙汰だったじゃない」
『マダム』は呆れたように言うと、とにかく入って、と玄関へと歩き出した。
「最近はご近所の目も厳しくてね、貴方みたいな若くてハンサムな男と楽しく話してるところなんて見られたら、目立ってしかたないのよ」
まったくこれだから日本は……とぼやく彼女を見つめながら、仕事の時と同じように気配を消して後を追う。
「あらあら、ニル・アドミラリが板についてきたじゃない」と、玄関のドアを開きながら褒める彼女。
「まあ、そのくらいできなきゃ仕事にならないか」
俺はそうでもないですよ、と返しながら、中へと促す彼女に従って、『マダムハウス』へと足を踏み入れた。

『マダムハウス』。
業界では『ラボ』とも呼ばれている『マダム』の自宅は、しかし一見すると普通の洒落た一戸建てである。
組織の下請をしている俺は、彼女の作り上げる『商品』のイメージから、てっきり中は立派な研究所のようになっているのだと思いこんでいた。
「どうしたの？何だか驚いた顔してるけど」
玄関から奥の部屋に向かう廊下で、私の前を歩いていた彼女が不意に振り向いて声をかける。
「いや、普通の家だな、って」
俺が素直な感想を言うと、「当たり前じゃない」と彼女は笑った。
「一応これでも旦那も子供も居る専業主婦ですからね、そんな妙ちくりんな家に住みたくありませんよ」
彼女の答えに、俺は思わず目を見張る。
「旦那と……子供？」
思わず口をついた言葉に、何よ、と彼女は頬をふくらませた。
「失礼ね、じゃあ聞くけど、私が家庭を持っちゃオカシイってわけ？」
「あ、いや、そういう訳じゃ」

彼女の剣幕に慌てて否定するが、時既に遅かった。
「そりゃね、私や人としてやっちゃいけないことに手を染めてますよ。若い頃から原因不明の中毒死に見せかけることの出来る毒薬を作って、あんたらみたいな殺し屋に手広く売り捌いてるんですからね」
「いや、それは本当に助かって」
「じゃあ何さ。毒薬を作る女は、普通の生活なんてしちゃいけないってのかい」
彼女の荒い鼻息混じりの怒声に返す言葉が見つからないでいると、彼女は不意に我に返ったのか、大きくため息をついて壁にもたれかかる。
「私ゃもう、そっちの世界から抜け出せないんだよ。ユキとおんなじ」
だからさ、と彼女はつぶやくと、奥の部屋に通じるガラスの入ったドアを開ける。
「せめてそうじゃない時くらい、普通の人生ってやつを味わいたいじゃないか」
だろ？と俺を見て力なく笑う彼女に、俺はただすみません、と詫びるしか無かった。

「はい、これ」
廊下の先にあった、ごくありふれたリビングのソファに座った俺に、彼女は何気ない様子で一通の茶封筒を差し出してきた。
俺はそれを受け取り、封をしていないその封筒の口を開き、中にオブラートに包まれた粉末が四つ入ってるのを確認すると、顔を上げてキッチンに居る彼女に頷いた。
「代金はいつも通りキャッシュで頂戴。このご時世だし、銀行は当てにならないからね」
キッチンの向こう側で何か作業をしている彼女が世間話をするように言うのが本当に世間話をしているように聴こえて、俺は思わず吹き出しそうになり、慌てて窓の外を見る。
しとしとと降る雨の中、あの紫陽花たちが、まるで自分たちの存在を誇示するかのように咲き誇っていた。
「紫陽花、好きなのかい？」
キッチンから出てこちらに近づく彼女の問いに、俺は苦笑いで答える。
「家族が幸せだった頃を思い出すんですよ」
その答えに、彼女がああ、と返してきた。

「そう言えば、ジローのところは無理心中未遂、だったっけね」
小さい頃、俺のオヤジはサラ金に追い詰められて無理心中を図り、包丁で母を殺し、妹を殺し、俺を殺そうとして、そして捕まった。
そのオヤジも、もう居ない。
殺してもらうつもりで渡した銃で自らの命を断ったオヤジは、今ではもう、白幡のように亡霊となって俺の前に現れることすらしなかった。
「本当に小さい頃のことですけどね」
俺はそこで話題を変えようと、ところで、と返しながら彼女に目を向ける。
湯気のたつカップを二つ持った彼女は、『マダム』らしい優雅なほほ笑みとともに一つを俺に手渡した。
「はい、甘茶。すっきりするから飲みなさいな」
大丈夫、毒は入ってないよ、という彼女に苦笑いを返しつつ、俺は出された飲み物をそっと一口飲む。喉を焼く熱さとともに、口の中に広がる甘みが、俺の身体に澱となって固まっていた緊張感を和らげてくれる気がした。

「どう？イケるでしょ、甘茶」
にこやかに笑う彼女に、俺は素直にはい、と答え、その答えに満足したのか、彼女はうんうん、と頷きながら俺の向かいのソファに座って自分のカップを口に付けた。
「で、質問の答だけど」
彼女の言葉に、俺は目を見開く。
「え、まだ何も聞いてませんよ」
驚く俺の様子がおかしかったのか、彼女はくっくっと含み笑いをすると、解るわよ、と当然のように言った。
「どうせ、その薬のことでしょ？」
彼女の問いに、俺ははい、と頷く。
「この一包で確実に死に至るのに、医者はその死因を確定できない。青酸カリのような死に方なのに、青酸化合物の反応が出てこない」
彼女はつぶやくように言うと、自分の胸元から封筒の中身と同じ薬を取り出した。
「これはね、あれから作ったのよ」
そう言って彼女は親指で窓の外を指差す。

「紫陽花、ですか？」
驚いた。
紫陽花から毒物が作れるのか。
「そうよ……もちろん、普通の紫陽花じゃせいぜいが食中毒を起こすくらいにしかならないけどね」
彼女はそう言うと、窓の外を眺める。
その目は、まるで最愛の人を眺めるかのように、優しく、愛おしそうに見えた。
「交配に交配を重ねて、あの紫陽花が出来るまで五年。そこからあの葉を無味無臭の粉薬に加工できるようになるまで三年、」
「……気の長い作業ですね」
俺が素直な感想を伝えると、彼女はまあね、と苦笑する。
「もっとも、気の毒なのはその八年の間に薬を使われたターゲットじゃないかな。最初の頃なんて、薬のせいで吐き気やめまいに襲われて地獄を見ている所に……」
ズドン！だからね、と冗談交じりに言う彼女に、俺は何となく微笑み返す。

「今じゃ、この庭にはあの紫陽花しか居ないのよ。他の虫や植物、動物は一切近づこうとしない」
まあ、当たり前だけどね、と力なく笑う彼女を、俺は静かに見つめるしかできなかった。

「じゃ、ユキによろしく」
玄関で靴を履く俺に、彼女は明るい調子で声をかけてきた。
「今、北イタリアだっけ？いいなあ、優雅なエージェント生活！」
うらやましいわあ、と本気で羨ましそうにする彼女に、俺は思わず吹き出した。

「なによ、こちとら普通の専業主婦なんですからね、それくらい羨ましがってもいいじゃないの」
そう言って頬をふくらませる彼女に、俺は笑いをこらえながらボルサリーノを頭にそっと乗せた。
「良いと思いますよ」
「え？」
俺の答えに、彼女が一瞬戸惑いを見せる。

「良いと思います。普通の専業主婦」
俺はそう言って彼女に目を向けると、
彼女は何を偉そうに、と笑いながら、ボルサリーノごと俺の頭をぐりぐりと撫で回した。

（了）

コミュニティ紹介

Mixi コミュニティ『創作が好き!』

創作が好き、何かを作るのが大好きなひと、いらっしゃいませ。

文芸文学、SF やファンタジー、詩や川柳。絵画やイラスト、立体作品、写真やインスタレーション。音楽や歌詞。ケーキやお料理まで、なんでも歓迎。
とにかく「創る」人のためのコミュニケーションを支援し、その情熱を応援します。

(コミュニティスペック)
開 設 日 ： 2012 年 02 月 20 日
管 理 人 ： しちみ黒猫
副管理人 ： かーる
カテゴリ ： 趣味
参加条件と公開 ：
レベルだれでも参加できる (公開)
トピックの作成権限 ：
参加者が作成できる
コミュニティurl ：
http://mixi.jp/view_community.pl?id=5922574

Mixiコミュニティ『創作が好き！』編集
作品集
『紫陽花のある風景』

編者　楢崎　六呂
2012年6月2日　第一刷発行

なお、本紙に掲載された著作物は、それぞれの著作者に著作権を有します。